丹保 憲仁

TAMBO Norihito

1933年北海道生まれ。工学博士。1957年北海道大学大学院工学研究科土木工学専攻修士課程修了。北海道立総合研究機構理事長。第89代土木学会会長。北海道大学総長、放送大学長などの要職を歴任。専門は環境工学、著書に『人口減少下の社会資本整備—拡大から縮小への処方箋』(2002年、土木学会)など。

いから、本社には何か言わせない。そうすると、事務所の中が、自分たちの判断でやれるということで、沸き立つんですね。それが、金に余裕があって、何でもかんでも本社に行ってOKを取ってくるということになると、みんな元気がなくなってしまう。

人に任せられるのが本当のリーダー

丹保——マニュアルというのは、どんなに精密に書いても精密になればなるほど読む時間はない。マニュアル社会というのは、徹底的に今の問題ですね。マニュアルは、1回は読んでおかないといけませんが、あとは自分の責任でやればいい。最悪のときは、そこのボスが責任を負えばいい。

仁杉——やはり、そこはリーダー論なんですよ。自分の権限で、本当に人に任せるとかね。そういう腹のないのがほとんどなんです。だけど、僕は本当のリーダーというのは、基本は自分で決めるけど、下の連中が自由にやれるような雰囲気をつくるということが、一番大事だと思うんです。

丹保——「わかるように説明しろ」「わかった。後はお前の責任でやれ」っていうことですよね。失敗したら俺が責任を取るよと。

仁杉——「俺が責任を取るよ」というところが最後にないと、人は動かない。だけど、今の世の中は、みんな逃げてしまって、誰の責任かわからない状態にしてしまう。

それと、いろいろなことを自分で考えて、実行に移すというようなことを、近頃の人はしないですね。

——これからの土木のあり方や役割をどう考えたらいいのでしょうか。

土木屋は地球の外科医

仁杉——日本全体を見直すことは、土木屋にしかできないと、僕は思うんです。だから、土木の「土」という字はね、むしろ地球と考えた方がいい。

丹保——おっしゃるように、土と木ということが土木の根本だと考えれば、土を掘って木で家をつくるのではなくて、土をちゃんと維持して、木を維持するということが仕事でしょう。それは、広い意味での環境保護なんです。それを矮小化してはいけないと僕は思